



道德実践に伴いやすい「盲点」に注意しないと、思っていたような効果や結果を得られません。

一般的に、はじめは純粹に相手のことを思っただけでも、次第に、返礼をしない相手に不平や不満を感じたり、非協力的な周囲の人物を責める心が生じがちです。

③ 形式的な道德
道德の実践において「今までこうしてきた」「皆がそうしている」などの理由や、表面的な形式が強調されすぎると、その道德が思いやりに欠けた冷たいものになったり、不測の事態に十分対応できなくなったりしてしまいます。

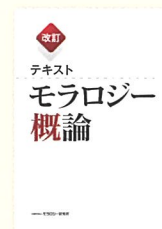
④ 調和を欠く道德
「自分は正しい」という意識が強すぎると、無理を重ねて体調を崩したり、他者との協調性を無視したりすることがあり、心身や集団の調和を乱します。

*
このように、私たちは不道德な言動には自他共に注意し、改善するよう努めますが、一旦、何かを道德的と判断すると、それに伴う右のような注意点を見逃ごしてしまいます。モラロジーでは、これらの道德実践上の盲点を「普通道德の限界」とし、その改善をめざしています。

今月の範囲

第一部 基礎編
第四章 普通道德から最高道德へ
一、普通道德の必要性と限界

モラロジー研究所の概論講座で使用されている改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は、「普通道德」の限界について図解します。



モラロジーを楽しく、平易に学びたい——。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成=「れいろう」編集部

道德実践上の盲点

「自分は正しい」のにうまくいかない理由

柏生涯学習センター研修企画担当 望月文明 (もちづきふみあき)

誰でも、日常生活の中でルールを守っているのに、あるいは良かれと思っただけにもかかわらず、予想通りの結果を得られずに、かえって反発を招いたり、状況がややこしくなったという経験があるのではないのでしょうか。

道德の問題は、正しいことや優しいことを「するか、しないか」だけではありません。正しいことや優しいことを「したのに」他者から誤解されたり軋轢あつれきが生じてしまうことは、珍しいことではないでしょう。その際に「自分は正しい、間違っていない」という部分に固執こしつしてしまっただけで、問題そのものの解決から遠ざかってしまいます。

モラロジーでは、日常的な道德の判断や実践には、次のような注意すべき「盲点」があると指摘しています。

① 一時的、感情的な道德
例えば、「かわいそう」「優しくしたい」という感情は、道德の実践上、重要ですが、そのような動機だけでは、相手のニーズを見誤ったり、過保護な対応から相手の成長の機会を阻むはばことがあります。

② 要求的な道德